

また同じ事を繰り返すのだろうか。来年四月予定の北海道知事選を巡り、野党側の候補者選びが年を越す可能性が高まってきた。再選出馬が確実視され、自民、公明両党が推薦する方向の鈴木直道知事（四一）に対し、立憲民主党をはじめとする道内野党の動きは鈍い。

鈴木氏は半年前の報道機関の道民世論調査で八割の支持を集め、「負ける要素が見当たらない」（自民道議）とさえ言われる。一方、候補者選びが難航する野党側からは「外れくじを引きたがる人はいない」（立憲関係者）との嘆きが漏れる。

立憲道連幹部は当初、今夏の参院選後に知事選の候補者選びを本格化させ、年内に決める青写真を描いていた。元・現国会議員のほか官僚、芸能人、道議らが取り沙汰されたが、状況は思わしくないようで、労組関係者は「最後は現職の国会議員の誰かが責任を取って出るしかない」と話す。

近年の知事選を振り返ると、旧民主党系の候補の出馬表明は年明けにずれ込むケースが目立つ。現参院議員の高橋はるみ氏が初当選した二〇〇三年の選挙以降、出馬表明は〇七年の選挙に挑んだ荒井聡元衆院議員が前年一二月だったほかは年が明けてか

道知事選の意味

ら。一五年の選挙は既に出馬表明していたキャスターの佐藤のりゆき氏に年明けになつてから「乗る」形になった。

本来、強い相手に立ち向かう選挙では「出たい人より出したい人」を口説き落とすのが鉄則だ。だが、それが難航を極める野党側の現状はかつての「民主党王国」の変質を象徴しているように見える。

こうした中、野党関係者の間では現職の鈴木氏への「相乗り論」さえささやかれ始めた。与野党相乗りは堀達也元知事の時代にもあったが、当時は自民側が後から加わった形で、構図が異なる。

相乗りは首長にとつては安定的な議会運営が可能になる一方、行政へのチェック機能や住民の関心の低下をもたらす。そうした弊害は、既に与野党相乗りとなっている道都・札幌でも現れている。

札幌市長選は来春の統一地方選で知事選と同日に投票される。三選出馬の方針と伝えられる秋元克広市長（六六）は、前回に続き与野党相乗りの体制で臨むとみられる。もともと旧民主党系が推していた秋元氏が、自民、公明両党も前回から支持に回り与野党相乗りとなった。

ただ、その後の市政運営では、冬季五輪・

パラリンピック招致、プロ野球日本ハムの移転、除排雪などの対応を巡り、市民は不満を募らせている。にもかかわらず市議会での議論は低調で、市役所内には次期市長選でも相乗りを背景に秋元氏が優勢との見方が強い。仮に知事選も与野党相乗りになれば、人口減少や新型コロナウイルス禍からの脱却が喫緊の課題となっている道政運営から緊張感を奪い、低調な道議会の議論にも拍車がかかるのは間違いない。

人口減少や地域の疲弊が加速する現状への対応は待ったなしだ。持続可能な北海道をどう描いていくのか、知事選でしっかりと議論を戦わせなければ、北海道が生き残っていくチャンスはさらに遠のく。盛り上がりや欠く知事選は、道民や北海道の民主主義にとつて、間違いなくマイナスだ。

野党側の窮状を見透かすように、鈴木氏は正式な出馬表明を遅らせ、相手の出方をじっくり見極めている。鈴木氏は将来的な国政転出の可能性も取り沙汰されており、知事選は与野党双方とも「次」もにらみながらの戦いとなる。野党の候補者選びの行方は、来春からの四年間だけでなく、その先を含めた北海道の民主主義の行く末を左右しかねない。

△転▽